Veritas No.38(2008.7.18)

目次　　（敬称略）

＜『米欧回覧実記』に見る世界＞
ー特集「夏休みに読んでほしい、読みたいこの一冊」に寄せてー
真栄平　房昭（図書館長）

＜特集　夏休みに読んでほしい、読みたいこの一冊＞
田邊　希久子（英文学科）
浜下　昌宏　（総合文化学科）
飯　　謙　　（総合文化学科）
津上　智実　（音楽学科）
小林　知博　（心理・行動科学科）
井出　敦子　（院長室職員）

＜研究室から＞
小林　哲郎

＜史料室から＞
佐伯　裕加恵

＜視聴覚センターから＞
林　裕市郎

＜神戸女学院大学図書館架蔵フランス語書目雑談　＞

―Ｖ・ユゴー『クロムウェル』初版本（１８２８年）について―（その１）

柏木 隆雄

＜図書館からのお知らせ＞

図書館

無断転載を禁ず

＜『米欧回覧実記』に見る世界
ー特集「夏休みに読んでほしい、読みたいこの一冊」に寄せてー＞

真栄平　房昭　図書館長　総合文化学科教授

廃藩置県後まもない明治４（1871）年、岩倉具視を全権大使とする使節団・留学生一行が、アメリカに向けて横浜を出港した。 欧米との条約改正、新しい国家の土台づくりを目的とした「米欧回覧の旅」のはじまりである。

帰国後、歴史家の久米邦武が編纂した『特命全権大使　米欧回覧実記』（明治 11 年刊）は、岩倉使節団の 632 日にわたる大旅行を精細に記録したもので、1890 年代の「世界」を輪切りにして見せてくれる。「旅好き」の人、地理や歴史、外国文化に関心のある人びとには、とりわけお薦めの本である。この世界旅行をつうじて使節団一行は、欧米における商工業の発展や先進文化を目の当たりにし、多くの刺激をうけた。たとえば、ヨーロッパの公共図書館や博物館について、次のような感想を記している。

「ヨーロッパの図書館・博物館を見学するたびに、非常に整っていると感じる。アジアのモノも、多額の費用を惜しまずに収集している。しかも驚くことに、日本のことで自分でも知らないことを解説されて、かえって日本のことを詳しく知って帰ってきた。ヨーロッパがしだいに進歩していく理由は、その根本に歴史を大切にする気持ちがあるからであろう。」

ニューヨーク、ロンドン、パリをはじめ欧州各地を旅した体験的な観察と記述は、都市の建築物や風景などを描いた多数の「銅版画」とあわせて、読者の想像力を大いにかきたててくれる。また、帰路のアジア旅行体験もいろいろと興味深いものがある。

以前、岩波書店が「私の愛読する一冊の本」という文庫読者のアンケートをとったところ、最も多かったのが『米欧回覧実記』であった。漢文調の流麗な文体が持つ独特の味わい、リズム感あふれる格調高い名文は、まさに「歴史的名著」と言えよう。近年、英語版も刊行されたが、日本語原典は岩波文庫（全五巻）に収録されており、手軽に入手できる。夏休みにぜひじっくりと読んでほしい。

【関連リンク情報】
●国際日本文化研究センター⇒日文研所蔵稀本・資料データベース⇒図録米欧回覧実記 http://www.nichibun.ac.jp/graphicversion/dbase/kairan.html『米欧回覧 実記』に掲載された図版や図版に関連する本文記事（原文）を収録する

＜特集　夏休みに読んでほしい、読みたいこの一冊＞

田邊　希久子　英文学科准教授

★『新感覚・キーワードで英会話――イメージでわかる単語帳』田中茂範・佐藤芳明・河原清志著　NHK 出版　2007 年刊 950 円

本書は NHK 教育テレビで放送されたシリーズをもとにまとめられた本です。
私は英日翻訳が専門ですが、英語の単語やフレーズを訳すとき、

①1 対 1 （word for word）で訳せるもの（専門用語など）、
②辞書のさまざまな語義からぴったりの訳を選ぶ場合、
③意味があいまいで解釈そのものが難しい場合
などがあります。
③には機能語といわれる接続詞や前置詞があてはまるほか、give や take などの基本動詞も意外と意味があいまいです。私の経験では、こうした言葉には「イメージをつかんで訳す」方法が有効です。本書はそうした言葉のイメージを教えてくれます。例えばある店に
Open from Monday through Friday
と出ていたとします。これは Monday to Friday とどう違うのでしょうか。
本書によれば、through は「トンネルのように空間を通り抜ける」イメージです。その間、移動物は切れ目なく通過していきます。したがって Monday through Friday は月曜から金曜まで「ずっと」、Monday to Friday だと火曜や水曜はあいているかどうかわからない（そんなことは絶対にないでしょうが）というニュアンスになります。
ぜひ参考にしてみてほしい 1 冊です。

浜下　昌宏　総合文化学科教授

★ヨゼフ・ピーパー『余暇と祝祭』稲垣良典訳、講談社学術文庫、1988

原著は 1965 年刊、著者ピーパーはミュンスター大学教授の哲学者だった人。文庫本で 100 ページ余の小冊子だからすぐに読めそうである、が、中味は深く、じっくり思索しながら読むことをお勧めします。余暇は西洋文化の基本的な要素であり、余暇あってこそ文化が生まれる、と説く。学校は知識の提供・習得の場というよりも余暇（「学校」の原義の

ギリシア語「スコレー」は余暇の意）の場であり、しかも余暇は自由時間として労働からの解放を謳歌するためではない。余暇を与えられて、ひとは観想（コンテンプレイション）に集中することが出来る。観想により、我々は世界を知り、人生を反省する。そして著者は、余暇の活動としての祝祭の必要性を主張する。なぜなら、祝祭と礼拝によって神々への憧れが生まれ、観想へと促す真の余暇がもたらされるからである。――祝祭に関する議論についてはいくぶん戸惑うかもしれないが、今日の異常な忙しさと労苦の毎日を思うと、人間らしさをもう一度考えるための良書でしょう。

飯　謙　総合文化学科教授

★今道友信『愛について』（中公文庫）

「愛神愛隣」を永久標語とする神戸女学院に連なる者にとって、「愛」はおりおりに考えさせられるテーマです。学生の皆さんにとっても、在学中のみならず、恐らく卒業後も、人生の分岐点にさしかかるごとに、心に浮かぶ問題となることでしょう。この書は、そのような心懐の良質なパートナーとなってくれることと思います。わたしはこの書を大学生であった頃に旧版（講談社）で読みました。その後も繰り返し目を通した、愛着ある書です。最近、文庫化されたことを知り、ここで紹介させていただくことにしました。

著者はたいへん高名な哲学者、倫理学者、美学者で、十指に余る著作があり、文芸・芸術批評も多数、手がけておられます。この書では、古代ギリシアの思想をベースとしながら、孔子から聖書、古事記、トマス、ルター、キェルケゴール、ロレンスなど、古今東西の著述（家）に言及しながら、その主題解明のヒントを提示してくれています。「考えること」とは何か、を考えさせてくれる書物です。一読をお奨めします。

津上　智実　音楽学科教授

このところ、往年のピアニスト小倉末（1891～1944）について調べている。小倉末は 1906 年に開設された本学音楽部の初期卒業生の一人（1910 年３月卒業）。東京音楽学校（現在の東京芸術大学）で半年、ドイツのベルリン王立音楽院で２年ほど学んだ後、

アメリカで活躍して評判になり、1916 年春、25 歳で東京音楽学校ピアノ講師に迎えられた。翌年、同校教授となり、それから四半世紀以上にわたって演奏と教育の第一線で活躍した。

その生涯を追っていくと、二つの世界大戦に翻弄された人生に思える。1914 年８月の第一次大戦勃発では、翌年のベルリン王立音楽院修了を約束されながらも、ドイツ脱出を余儀なくされた。ベルリンを出る最後の列車に日本人留学生や駐在員ら 100 人余と寿司詰めになって、オランダまで普通なら６時間のところを一昼夜半も立ち詰めで逃れたという（世界の蝶々さんとなるソプラノの三浦環も一緒）。第二次大戦中も、上野の音楽学校の長老であったが故に大変な思いをしたらしい。

音楽家たちが戦争の時代にどのような境遇に置かれ、どのような行動を取ったのか。この問題を一次史料に基づきながらていねいに追った本が今年２月に出された。戸ノ下達也著『音楽を動員せよ：統制と娯楽の十五年戦争』（青弓社、2008 年 2 月）は、1931 年９月の満州事変から第二次世界大戦に至る十五年戦争期の音楽について、音楽界の組織化の実態や「国民歌謡」「国民合唱」といったトピックを通して、音楽が「戦争の手段」としてどのように活用されていったのかを浮き彫りにしている。戦時期の音楽の研究は、文学や美術、映画などの他分野に比べて立ち遅れており、その実態を歴史的な史料に基づいて描き出した本書は一読に価する。8月 15 日の「終戦記念日」の前後、今年はオリンピック観戦で忙しいかもしれないが、戦争と音楽というテーマについてもぜひ考えてみてほしい。

ひょっとすると学生の皆さんには、大学３年時のゼミでのレポート２本がまとまって本となった森脇佐喜子著『山田耕筰さん、あなたたちに戦争責任はないのですか』（教科書に書かれなかった戦争 Part16、大学生が戦争を追った）（梨の木舎、1994 年５月）の方が親しみやすいかもしれない。森脇佐喜子さんは恵泉女学園大学３年生だった 1992 年当時、「アジアと日本」という講座の「アジア太平洋戦争とは何だったのか」を問うゼミで「戦争とプロパガンダ」というテーマを与えられ、前期に「少国民と学校唱歌について」、後期に「軍人作曲家　山田耕筰」というレポートを書いた。これが反響を呼んで大学４年時にまとめたのが本書である。自分の疑問をていねいに掘り下げて行くことのおもしろさと価値を感じさせてくれる本でもある。ゼミのレポートに取り組んでいる学生さんたちに一読をお勧めしたい。

楽しい夏休みに戦争の本ばかりというのも無粋な話。最後に掛け値なしに楽しくてためになる本を一冊紹介しておこう。それは岡田暁生著 『恋愛哲学者モーツァルト』（新潮選書、2008 年３月）。著者は京都大学人文科学研究所准教授だが、実は本学大学院音楽研究科で昨年度まで教えて下さっていた岡田先生でもある。リヒャルト・シュトラウスのオペ

ラ研究でデビューし、『オペラの運命』でサントリー学芸賞を受賞した気鋭の学者の最新作は、モーツァルトの５つの喜劇オペラ《後宮からの逃走》《フィガロの結婚》《ドン・ジョヴァンニ》《コシ・ファン・トゥッテ》《魔笛》を「恋愛五部作」として読み解こうとする試み。「冷めた酷薄な人間観察の視線や、背筋も凍りつく哄笑や、サディスティックな破壊衝動が、少年のような一途な人懐こさ、そして音楽史の奇跡ともいうべき「美」と違和感なく同居する奇怪さ」にモーツァルトの音楽の特異性を見て取り、モーツァルトを「徹頭徹尾『時代が生んだ子』」として読み解く。「男と女の結びつき（エロティシズム）」は人間にとって永遠のテーマ。音楽の好きな人はもちろん、そうでない人にとっても 18 世紀のヨーロッパ文化史を理解する一つの楽しい手掛かりを与えてくれるに違いない。

小林　知博　心理・行動科学科准教授

★『夜と霧』新版　ヴィクトール・Ｅ・フランクル著（みすず書房）2002 年
（旧版タイトル：夜と霧―ドイツ強制収容所の体験記録　1956, 1985 年）

本書は、「心理学者、強制収容所を体験する」という原題の通り、医師であり精神医学・心理学的知識を持った著者が、被収容者や監視者の心理に焦点をあてて論考した、半世紀以上経ってもなお読み続けられているロングセラーです。人間が、精神的極限状態に入れられたとき、感情がどのように鈍磨し消滅していくのか、普段は社会的に抑制されている利己性がいかに表に現れてくるのか、人の精神・身体がどのように崩壊していくのか…。私たちの日常からは想像もできない状況における人間の思考や行動について、非常に冷静・客観的に記述され、分析されています。その論考は突き詰めれば「人間とは何か」を問うていると言えるでしょう。

今回、本書を薦めたいと思ったのは、学生時代の夏休みのように、時間的、そして恐らく精神的余裕がある時期は、あえてきつい目の本を読んで、人間や人生について再考してみるのもよいのでは、と思ったからです。かくいう私は、学生時代、たまたま家族と離れて１人で年末年始を過ごした時に読んで、その内容の重さに１人でドーンと落ち込んでしまいましたが…。

さて、本書を読みながら自分自身をふりかえってみて、印象に残った箇所が３つあります。１つ目は「人生に何を期待出来るかが問題なのではなく、人生が何を我々に期待しているかが問題なのだ」というフランクルの言葉です。何に関しても受身の人生より、自ら

行動して「自分に何ができるか」を積極的に考えられるようになれると、また違った人生の味わいが得られるように思います。2 つ目は「人生は歯医者の椅子に座っているようなものだ。さあこれからが本番だ、と思っているうちに終わってしまう」とフランクルが引用するビスマルクの一節です。「現在」を一生懸命生きることの重要性を説いているといえます。3 つ目は、わたしたちがどんなに最悪の状況でも「その状況に対する態度を決める自由」だけは決して失われない、というフランクルの言葉です。 これらの言葉、また本書全体を通した、さらに深い著者のメッセージについては、ぜひ皆さん自身で読んで確認してみて下さい。何度読んでもその時々に応じて考えさせられるものがある本だと思います。

井出　敦子　院長室職員

「言葉の微妙について」

★亀井勝一郎（1907-1966）『恋愛美学』（『亀井勝一郎全集』第１０巻）
　講談社、1971 年　850.8/KA5/V.10［JD 館書庫］

パソコンで電子メールが送れるようになり、携帯電話で相手の家ではなく本人に電話をかけることが出来るようになり、更にわざわざパソコンを立ち上げなくても携帯電話で写真や動画までつけたメールが送れるようになりました。便利で簡単で相手の事情を慮おもんばかる 必要のないコミュニケーションのツールが、驚くほどの速さでもっと便利でもっと簡単でもっと「技あり」になって次々に提供されています。

勿論、私自身も仕事で、プライベートで、日々その進化の恩恵に浴し、その効用は十分に承知しています。こうしたツールなしには出会うことも、気軽に連絡を取り合うこともなかっただろう人たちとの交流を思う時、そのありがたさをしみじみ感じます。でも、でもでもでも、時折「言葉を発する」ということがこんな風にただただお手軽なだけでよいのだろうかという不安を覚えることがあるのです。

そんな時に思い出すのが、遠い日に出会って心に衝撃を受けた、亀井勝一郎の『恋愛美学』の中の「言葉の微妙について」という文章です。少々古くいかめしい文体に気後れしても、作品全部ではなくこの章だけでも構いませんから、一度読んでみてください。そして「ただ今臨終と覚悟してみよ。いままで何げなく使つてゐた言葉はもう言葉と思われないであらう。今はじめて言葉を発する人のやうに、一語一語無量の思いをこめて発するで

あらう。」という言葉の世界に是非触れていただきたいと思います。

私もこの夏、パソコンも携帯電話もしばし忘れて、もう一度ゆっくり読み返してみることにいたしましょう。

＜研究室から＞

小林　哲郎　心理・行動科学科教授

私の研究室は，長年のスクールカウンセラーの実践，大学生の学生相談のカウンセラーの経験に基いて学校臨床心理学を看板に掲げています。

しかし，私が大学院生だった頃は，私はパーソナリティに関する研究で学術論文を書いていました。当時（30 年ほど前），私が大学院でテーマにしていたのは「あいまいさに対する寛容さ」（Ambiguity　Tolerance）というパーソナリティ特性でした。その概念ではＡＴの低い人は同じ対象の肯定面，否定面の現実的共存を認知できないのではないかとされており，その二面的認知を直接的に測定することに力を注いでいました。そして，試行錯誤を経て考案したのが文章完成法を応用した SCT-B という心理検査でした。

SCT-B では，25 の刺激文について一旦文章を完成させた後で，折り込んだ紙を広げると「が」のついた空白行が提示されます。そこにもう一文書いてもらうという二段階の課題です。「が」の前後には＜肯定否定＞の二面的認知のパターンもありましたが，＜肯定肯定＞，＜否定否定＞という一面的パターンや後半では＜不安＞，＜希望＞，＜決意＞と言えるような反応，＜自己＞に言及するものなど多様なパターンが見られました。そこで，それらの反応パターンの比率がどのようなパーソナリティ特性と関係するか，他の心理検査の尺度との相関をとって研究することにしたのです。

最初は単純に，＜不安＞や＜決意＞の多すぎる人は神経症的というような関連を予想していました。しかし，神経症者のグループと健常者のグループの，＜不安＞のパターン，＜決意＞のパターンに必ずしも有意な差が出ないこともわかりました。健康な不安もあるし，決意はやる気の強さと関連するようです。私は，その段階で意欲を喪失し，10 数年 SCT-B の研究を中断していました。しかし，自分が 50 歳に近づき，人生の午後を過ぎた頃，生きている間にこの検査を公表しておこうという気になり，恩師の一人の退官に合わせて博士論文としてまとめることにしたのです。まとめ直してみると，今まで，面倒でパスしていた，反応パターンの組み合わせによる分析が有効なことがわかりました。そして，

今までにない，多面的パーソナリティ理解の道具として位置づけると，結構おもしろい検査であることがわかってきたのです。昨年度，着任早々にもかかわらず，研究所より多額の出版助成を頂き，本にすることができました。

一見無駄に見えることの中にも，視点を変えると意外なことを見いだせることがあります。「とにかく，やってみること，続けることがいつかは実を結ぶ」というと大げさかもしれませんが，「やらないことには始まらない」ことだけは確かなようです。

＜史料室から＞

佐伯　裕加恵　史料室職員

「デフォレスト先生召天 35 年に寄せて」

神戸で誕生した神戸女学院が西宮に移転したのが 1933 年ですから、今年はキャンパス移転 75 周年ということになります。このキャンパス移転という大事業を成し遂げたのが、今回ご紹介する Miss Charlotte Burgis DeForest、神戸女学院第 5 代院長です。先生は戦前から戦後にかけて、人生の大半を神戸女学院とともに歩まれた宣教師で、この学院の「中興の祖」ともいえる方です。

今から 35 年前、先生はアメリカ、カリフォルニア州クレアモントにある引退宣教師たちの住む町ピルグリム・プレイスでその 94 年の生涯を終えられました。そしてその遺灰は日本に送られ、今、仙台に在るデフォレスト家のお墓に葬られています。アメリカで亡くなったアメリカ人宣教師のお墓がなぜ日本に、それも仙台にあるのでしょうか。

デフォレスト先生は 1873 年に大阪で生まれました。お父様は、神戸女学院を創った宣教師 Miss Eliza Talcott と Miss Julia Elizabeth Dudley と同じ海外伝道団体 American Board of Commissioners for Foreign Missions（通称アメリカンボード）から派遣された宣教師で、1886 年から仙台で宣教活動を続け、日本で亡くなり、仙台に葬られました。ですから仙台にデフォレスト家のお墓があるのです。

先生は仙台で育ちました。教育は家庭でお母様から受けました。しつけは厳しく、責任感を養うことや、勉強だけでなく手芸や日本文化も学ばれたそうです。15 歳でアメリカに帰国し、高等教育を受け、大学卒業後、アメリカンボードの宣教師として 1905 年に神戸女学院に赴任することになりました。 先生は日本語を日本人並みに理解し、流暢に話されました。日本人でさえ難しい漢字も読み書きされていたそうです。また、日本文化についての造詣も深く、日本の詩歌についての論文で学位も持っておられます。

1915 年から 1940 年にいったん帰国するまで神戸女学院第 5 代院長をつとめ、大学部を充実させ、キャンパスの岡田山への移転を成し遂げました。 「私達の進展の基盤は祈りであります。私たちはチャペルを守り、聖書の研究や YWCA そして共励会の働きを続けてゆきます。」院長就任に当たって先生が同窓生に語りかけた言葉です。

滞米中に戦争が起こり、帰任できなくなった先生は、アメリカで日系人のために働かれました。戦後は一切の役職につかず、求めに応じて授業を担当し、学生や卒業生たちとの交流を楽しみました。キャンパスで同窓生達が先生を囲んで談笑している光景を見たある理事は「これこそ私の言う女学院らしさであり、学院情景の潤いであり、ここに学院の校風は沸き出るのであります。決して教室で講義をし、講堂で説教しただけでは斯くも親しまれるものではありません。人徳のしからしむるところ誠に我が学院の至宝であります。」といっています。先生は人との交わりと祈りを大切にされました。皆はずっと日本にいて欲しいと願いましたが、1950 年、先生は引退帰米を決意されます。「私は宣教師です。宣教師は捧げることのみが仕事であって、老後、この国の皆様の重荷になってはなりません。御用が終わったら老醜をさらさずに、元気な姿のままで皆様の前から姿を消すべきだと考えています。」と言って。

アメリカに引退してからも先生は学校のことを気にかけ、常に祈りを捧げてくださっていたそうです。そして亡くなるとき、遺灰を日本に送って欲しいと遺言されたのです。老後の重荷はかけず、しかし、骨は日本の土に埋めて欲しいという先生の精神を、ある方は「日本に根をおろしたピューリタニズム」と評しています。

日本をこよなく愛し、日本をよく理解していたデフォレスト先生。神戸女学院の教育の特色である国際理解の精神は、先生を通して私たちに示されていると思います。

＜視聴覚センターから＞

林　裕市郎　視聴覚センター職員

２００８年４月より、“視聴覚センター”は事務組織改革により、図書館に統合されることになり、図書館職員（視聴覚センター担当）として、業務を遂行することになりました。 どうぞ、よろしくお願いいたします。

視聴覚センター担当として、現在３人の職員で事務を担っており、事務室は文学部１号館１階にあります。 視聴覚センター担当として担っている主要な業務は、次の２つです。

１つ目の業務は、マルチメディア装置・視聴覚機器の整備やメンテナンスです。

DVD、ビデオ、CD など、視聴覚教材を授業で使用される先生方が増え、授業中における視聴覚教材活用の重要性が高まっています。視聴覚センターでは、先生方が視聴覚教材を活用した授業をスムーズに実施できるよう、教室設置の視聴覚機器の充実・刷新および日常的なメンテナンスに取り組んでいます。

さらに、授業中もしくは授業前において、先生に対し視聴覚機器の操作補助＆説明、機器のスタンバイ、機器のトラブル対応といった、視聴覚機器使用に係る授業サポートも行っています。

２つ目の業務は、AV ライブラリーの運営です。

AV ライブラリーは、文学部１号館１階にある、DVD・ビデオ・CD など、視聴覚メディアソフトを多数所蔵している小型の図書館です。授業で指定された教材ソフト視聴のため、TOEIC や TOEFL など資格試験対策の学習のためなど、教育目的で来館する学生も多く、授業期間中は毎日多くの学生の皆さんにご利用いただいています。

AV ライブラリーの特色は、教育的価値の高い多様なジャンルのソフトを多数所蔵していることです。

また、館内はパーティションで仕切られた個室タイプの視聴覚ブースをいくつか設け、利用者の方々が学習する上で適した環境を整えています。

今後も、館内の施設環境向上や所蔵ソフトの充実に取り組み、利用者の方々にとって、教育的価値の高い、かつリラックスできる図書館を目指し、運営に一層励んでいきます。

多くの皆さんの来館をお待ちしています。

視聴覚機器のこと、AV ライブラリーに関して、不明点やご意見などございましたら、気軽におっしゃっていただければ幸いです。

＜神戸女学院大学図書館架蔵フランス語書目雑談Ⅰ
　　―Ｖ・ユゴー『クロムウェル』初版本（１８２８年）について―（その１）＞

柏木 隆雄　大阪大学名誉教授・放送大学大阪学習センター所長

１．　前口上

先頃、Veritas に掲載したいということで、図書館の阪上さんから同館所蔵のフランスの稀覯書について記事を依頼された。私が神戸女学院大学にお世話になっていたのは、１９７５年４月から１９８３年３月までの８年間、そのうち１９８１年９月から翌８２年の７月半ばまでパリに留学させて頂いたから、岡田山での正味の勤務は７年と少し、ということになる。留学期間中は柄にもなく博士論文を書こうと思い立って、講義に大学へ出かける日を除いて、太陽の射している間は、小さなステュディオに立てこもって執筆に明け暮れるはずだったので、最も大きな誘惑である古書店めぐりを自ら厳しく禁じて、たった一軒、家内が学生時代を過ごしたポーランド系の女子修道院が経営する女子寮の寮母さんを訪ねる際に、ついその近くにある小さい古本屋だけ覗くことにしていた。

その主人コラス氏はすでに労働定年をすぎていて、言わば余暇を過ごすように、その小さな古書店に座っている、という感じだった。少し大柄な温厚な紳士で、口数は多くないけれど本に対する愛情は十分に漂っていた。１９８０年発行の「パリ古書店案内」には「１９-２０世紀の美術書、全集の類がそろっている」などの記述がある。確かにここにはアシェット社の有名な文学校訂シリーズ「フランス大作家叢書」が革装丁で並んでいたりして、初めて店に足を踏み入れた時は胸が躍った。「ラシーヌ全集」、「コルネイユ全集」など手当たり次第に買い込んでは、せっせとその大量の本を大学の研究室宛てに送ってもらう。不在の間、当時のゼミ生の何人かに頼んで、届いた荷物を個人用と大学公費用と区別して整理してもらっていたが、帰国した時、デフォレスト館三階の研究室は個人用に買った本の山で大変な有様になっていた。

コラス氏は親しくなると、自分が秘蔵している珍しい本を見せてくれるようになった。ある時ジョルジュ・サンドの全集を探しているが、なかなか見つからない、と言うと、あぁ、自分の持っている中にあるよ、見せてあげようか、とこともなげに言って、土間にしつらえてある地下室へのドアというのか、蓋というのか、それを持ち上げて下に降りて行くと、数分後にたくさんの本を抱えて見せてくれた。欲しそうにしたのだろう。自分の楽しみに持っているものだが、欲しければ売ってあげようと、破格の値段で売ってくれた。１８５０年代に流行った大版のいわゆるエディション・ポピュレール（大衆版）というの

で、挿絵のたくさん入っている二段組みの１０巻もので、なかなかの逸品である。保存も良好で、私の蔵書の中で自慢の一つとなっている。

ほかにもいくつか貴重な本を氏の蔵書から買い込んだ。老人はいずれ店を畳んで、パリ郊外の家でゆっくり本を読むのが楽しみだ、と言っておられたが、私がその次にパリを訪れた時には、もうその店は無くなっていた。隠居先を聞いておけばよかったのだが、本を掘り出し、買うことに忙しかった当時の私は、いつまでもその店がある気がしていて、まさか翌年に店を畳んでしまうとは思いもよらなかったのだ。今もラスパイユ通りに花屋の隣にある彼の店の前を通ると、しみじみとその店のたたずまいを思い出す。

２．　本をどう買うか

パリで買い込んだ書籍は、私の蔵書の貴重な一部分となっているが、大学の図書館用にも多く送り込んだ。私は留学から帰ってその翌年に女学院を去ることになったので、その年以後公費で図書館に入れてもらうことは無くなった。今回このエセーを書くということで、私が勤務していた期間に公費で買い入れたと思われる書籍のリストを図書館で作ってくださったが、それを見ると、しっかり覚えているのもあるが、へぇー、こんなものを、と思うものもある。先の Veritas に英文学の教授として長く勤められていた松村昌家先生が、図書館所蔵の貴重なヴィクトリア朝の書籍の紹介をされており、それを拝読すると、質、量ともに立派なもので、こういった資料がますます活用されて、英文学研究の実があげられることが期待されるが、私が購入したものは、期間も短いこともあって、それほど稀覯の書が多くあるわけではない。

ただここで是非言っておきたいのは、神戸女学院大学では、外国書籍を購入する際、個人で直接古書店に注文して届いたものも、公費で後に払い戻される一種の立て替えが認められていたということだ。これは当時の国立大学では到底考えられないことで、公費の場合、外国書はそれらを輸入する日本の業者を通してしか購入することができなかった。新刊書はともかく、古書となると店によって値段は異なるし、また当時は１フランが７０円くらいした時代。それが日本の業者を通すと、ほぼ３倍近い価格になる。私は以前から直接パリのソルボンヌ前にあるニゼ書店に書をやって、彼のところで出版される本も、他の出版社の書籍も購入、送付してもらっていたので、いつも多少割り引いてもらっていたし、それでなくても日本の書店で買うよりはずいぶん安く買うことができた。当時助教授の研究費は多くて１０万かそこらだったが（大学を辞める時には、職員組合の要求もあって２０万円くらいになっていたはず）、実質その３倍近くを買えていたはずだ。

神戸女学院大学は私が専任として雇われた最初の大学だが、就職して研究費を頂けるのは実に有難かった。それをどのように使うかについて、自分なりに法則を決めた。研究費は自分のためでもあるが、広い意味で公共の性格のものでもある。そして自分がその大学でどのような書籍を買うか、ということは、大きく言えば、大学の研究水準そのものの評価を決めることになる。自分が勤めを果たして辞めた後、残った書籍が屑みたいな本しかなかったということにならないようにしよう。しかし限られた予算で、残すに足る立派な書籍をカバーすることは到底できない。そこで、とにかく新刊、古書を含めて、自分が研究しようとしているフランスの小説家オノレ・ド・バルザック（１７９９－１８５０）に関する研究書の購入に大半を当てるようにした。いろいろな作家のテクストも欲しいがこれは私費で買うべきだろう。自分の研究対象以外の作家のテキストについては、研究室に定本がまず備わればよい。ただしバルザックの場合は、手に入る限り、なるべく多くのエディションに当たろう。また研究書については、良本もあれば、屑本もある。これを個人で買うのは限りがあるとともに、良本を集めるばかりになるが、図書館ということになれば、良、不良を問わず、とりあえず刊本となるものが揃っている、ということが大事ではないか。つまり限られた研究費では特定の作家（私の場合はバルザック）の内外の研究をとにかく集める。一人の作家に限定すれば、年々発刊される書籍も十分にカバーできるだろうし、そうして継続していけば、数十年ののちには、それなりの研究センターのような実績をもつことになるはずだ。

そんなことを考えて私は在職の間は、バルザックに関する書籍を蒐集することにきめ、それでなお余裕の出る時は、１９世紀の小説研究や、それに必須の辞典の類を購入するように努力した。せいぜい８年程度の期間で集められた書籍の質も量も限られていたが、女学院を出て、ある研究会に出席した時に、女学院の図書館はバルザックの研究書が充実しているそうだ、というのを誰かが言っているのを聞いて、実にうれしい思いをしたことがある。女学院から移った阪大仏文では、研究費は個人で勝手に使うというより、研究室全体に与えられたもの、という考えで、教授と助教授が毎週その予算内で購書の相談をして、仏文研究室としてふさわしい研究書やテクストを中世から現代まで満遍なく集めるということだったから、女学院でしたような、個人が研究費を使って一つのテーマで蒐書することはできなくなった。自分に必要な研究書やテクストは私費で買う。それは女学院のときでもある程度そうだったけれど、阪大の仏文ではひたすら研究室の書籍の充実という形で相談した。それもまたとても楽しく、愉快でもあったが、女学院の時に一人であれこれ使い道を考えながら、蒐集ができていくのもまた楽しいものだった。

さてそれでは神戸女学院大学にある思い出多い書籍は何か。それを与えられた紙面で語っていこう。じつはこの稿を書くために、阪上さんに頼んで、地下の貴重書も収められている書庫に案内してもらい、懐かしい書籍に対面したのだが、その中に一冊、とんでもな

いものを見つけた。ヴィクトル・ユゴーの『クロムウェル』初版（１８２８年刊）である。こんな貴重書が普通の書籍と同列に並んでいるのを発見して、思わず頓狂な声を上げた。次回はまずこの稀覯書から話を始めたい。

＜図書館からのお知らせ＞

●図書館システムのリニューアル

本年９月 16 日に図書館システムのリニューアルを予定しています。
機種変更を行い新機能が増えますので、ご期待ください。

①検索できる項目が増え、より細かく検索ができます。
②全国の大学図書館等の総合目録も同一画面で検索できます。
③携帯電話、インターネットから図書館資料の検索だけでなく、 個人の図書館利用状況の確認、貸出中図書の予約などもできるようになります。

図書館システム入れ換えに伴い、９月 10 日から 12 日の３日間、 図書館本館･新館･音楽学部図書室、AV ライブラリを閉館させていただきます。